

特集「現代世界と宗教」

Feature : Religion in Today's World

■ 連続公開講演会「現代世界の宗教」（第一回）

仏教の終末論、神変、そして法華経

梶山雄一

— 法華経における劫火と神変 —

この承知の方がたも多いと存じますが、『法華経』の「如來壽量品」には、釈迦牟尼仏は仏陀に成ってから無量百千万億劫、つまり無限ともいえる時間を経ていて、またこれから後もそれ以上の時間のあいだ生き続けるのである、時に人間として死んだように見せることがあるが、実は死ぬわけではなくて常に靈鷲山において生き続け

て、教えを説いているのである、と書かれています。仏が死んだり、生きて法を説いたりして見せるのは仏の衆生救済の方便のためであって、人々は仏の死を見れば仏を偲んで懷かしみ慕うものであるから、そうして人々の心が柔軟となつた時に仏はこの世に身を現して法を説くのである、それが仏の神通力である、というのです。

そのように言つた後で『法華経』は世界の終わりに起るという大火、この地球を焼き滅ぼして灰さえも止め

ない、という大火災に言及いたします。釈迦牟尼仏の国土であるこの世界は淨土であつて、安穏で幸福に満ちているのに、衆生たちはこの世界が「劫火」つまり世界を焼き尽くす大火災によつて破壊されると見たり、自分たちも焼かれるという恐れに戦き、苦惱と恐怖に満たされている、と妄想しているのである、と言つてゐるのであります。

同じ『法華経』の「見宝塔品」には、大地から涌き出た多宝如来のストゥーパ（塔）が空中に懸かり、釈迦如来は全宇宙に散つていた無数の、自分の分身の如来たちをこの世界に集めた上で、多宝塔に昇つて、多宝如来の隣に坐り、いわゆる「二仏並坐」の奇跡を現す、という有名な物語があります。その二仏並坐を行う前に釈迦如来は神変を現します。釈迦如来が額の白毫から光明を放ちますと、宇宙の十方にある無量無数の世界の仏陀たちが、その菩薩たちとともに衆生に法を説いているのが見えまいります。十方の諸仏——その諸仏はみな釈迦如來の分身すなわち化身に他なりませんが——は釈迦如來と多宝如來とを供養するためにこの娑婆世界に降りてこ

ようします。するところの娑婆世界はたちまちに淨土に変わります。それらの諸仏とその菩薩たちを受け入れるために釈迦如来は二度までもこの世界を拡大しますが、そのときには地獄・餓鬼・畜生・阿修羅は消え失せ、釈迦牟尼仏の集会に集まつてゐる衆生以外の神がみや人々も他の世界に移されます。また地上の大海・河川・湖・須弥山や大鉄圍山（鉄輪圍山）なども消えてしまいます。この地獄・餓鬼・畜生などが消え、山や川も消えて大地が平らに美しくなる、ということは、後に述べる終末論や神変とも関係あることになります。

さらにこの經典の「如來神力品」では、釈迦如来と多宝如来とは、地中から現れ出て釈迦如来のもとにいた無数の「地涌の菩薩」たちやその他の衆生たちの前で神通力を現します。二人の仏陀は微笑を浮かべ、口の中から広大な舌を出して梵天の世界にまで触れ、多数の光明を放ちます。その光明は宇宙の十方の世界に遍満し、その多数の光線の一つから無数の菩薩が現れて宇宙の十方の世界に散つて、教えを説きました。多宝如来と釈迦如来を見るために集まつていた宇宙の無数の仏陀たちも広大

な舌を出して無量の光明を放ちました。釈迦如来や諸仏は長い間その神変を続けますが、やがて舌を收め、しゃぶきをして指を鳴らします。この二つの音は十方の諸仏の世界に至り、また大地は六種に震動いたします。そして宇宙の十方の世界のなかの衆生たちはこの釈迦如来の国土である娑婆世界に集まっている無量無数の諸仏、多宝如来と釈迦如来、さらに無数の娑婆世界の衆生たちを見ることが出来ました。十方の仏土の衆生たちが華・香・種々の装飾や宝石などを娑婆世界の上に散華しますと、それらは大きな帳とよとなつて娑婆世界にいる諸仏を覆い、十方世界は一つの淨土のようになります。

『法華經』にはまだ他にも仏の神変の記述はたくさんあります。とりあえず上の三つ、「如來壽量品」にある世界の大火灾、「見宝塔品」の放光の神変、そして「如來神力品」にある、十方世界の衆生たちがこの釈迦如来の娑婆世界の有り様を見る、という神変をとりあげて説明してまいりましょう。『法華經』自身にはこのような世界の終末や神変の奇跡などについてはなんの説明もありませんし、また『法華經』を読む現代の人々も、これ

らは神話的な物語にすぎないものである、と考えて、その起源を探つたり、意味を考えたりはあまりいたしません。

しかし、仏教には古くから一種の宇宙論がありますし、その中には、この世界の破壊を語る終末論がありました。その終末論も小乗仏教のものと、それが大乗仏教になつてから仏や菩薩の神変あるいは神通力という形に発展したものとがあります。『法華經』の「如來壽量品」に現れる、この世界が火災によって破壊される、というは小乗仏教の終末論に現れる、世界を滅ぼす「劫火」（世界毀滅の時期に起る大火災）に言及しているものです。「見宝塔品」や「如來神力品」にあらわれます仏の威神力は大乗仏教の神変を部分的に描いているものです。終末論にしても神変にしましても、その神話は古代の佛教者的思想表現の一つの型であります。その神話的表現を現代において解説して、そこから思想を引き出すことが実は宗教にとって大変重要なことなのであります。佛教の終末論と神変は空とか無という思想の小乗的な、そしてまた大乗的な形を語っているものであります。

『法華經』が何度も言及している終末論や神変の思想的な意味については後にお話しますが、とりあえず、それらの物語の大筋を整つた形でお話することから始めましょう。

阿含經の中には『世記經』を初めとして、同本異訳と

考えられる四經が世界の終末を含む宇宙論を記述しています。それを基礎にして『世間施設論』、『俱舍論疏』など多くの小乘論書が終末論を体系的に叙述しています。

大乗仏教になると『法華經』『大品般若經』その他、殆どの初期大乗經典が仏の神変を記述しています。私はこの仏の神変が阿含經における小乘仏教の終末論の大乗的な發展に他ならない、と考えます。さらに、淨土教が一種の終末論であることはすでに学者の指摘する所であります。私は『無量壽經』に現れる、阿彌陀仏の他力による衆生救濟の思想が、初期大乘經典に現れる神変に根拠をもつていて、その意味で淨土教も仏教終末論の系譜に含められる、と考えています。世界壞滅の時期に起る火災などの「大の三災」を典型的な小乘の終末論とみなし、大乗の終末論については『大品般若經』の神変を

紹介し、その思想が淨土教の他力思想をも含めて、大乗佛教の「空」の思想に根拠をもつてることをお話し、最後に『法華經』の「藥草喻品」の記述を小乘・大乗の終末論と結び付け、空の思想を簡単に解説してみたいと思ひます。

二 小乘仏教の終末論——大の三災

小乘仏教の終末論によりますと、この地球は火・水・風の三つの大災害によつて破壊されます。この世界の壞滅は仏が、一切のものの無常を示し、人々に解脱を求める為に説かれるのです。それぞれの災難の直前には人間は仏教を奉じ、十善行を修めていて道徳的に完全であり、平和で安穏な生活をしています。十善行といいますのは、殺生・盜み・邪淫・妄語・両舌・惡口・绮語(意味のないおしゃべり)・貪欲・瞋恚・邪見の十種の悪行を慎むことで、出家・在家を問わず、すべての佛教徒の道德規範となつていたものであります。

三災はまず火災から始まります。火災が起る直前に、ある人が色界第一禪を修めて第二禪天に上昇し、禪を妨

な舌を出して無量の光明を放ちました。釈迦如来や諸仏は長い間その神変を続けますが、やがて舌を收め、しゃぶきをして指を鳴らします。この二つの音は十方の諸仏の世界に至り、また大地は六種に震動いたします。そして宇宙の十方の世界のなかの衆生たちはこの釈迦如来の国土である娑婆世界に集まっている無量無数の諸仏、多宝如来と釈迦如来、さらに無数の娑婆世界の衆生たちを見ることが出来ました。十方の仏土の衆生たちが華・香・種々の裝飾や宝石などを娑婆世界の上に散華しますと、それらは大きな帳ととなつて娑婆世界にいる諸仏を覆い、十方世界は一つの淨土のようになります。

『法華經』にはまだ他にも仏の神変の記述はたくさんあります。とりあえず上の三つ、「如來壽量品」にある世界の大火灾、「見宝塔品」の放光の神変、そして「如來神力品」にある、十方世界の衆生たちがこの釈迦如来の娑婆世界の有り様を見る、という神変をとりあげて説明してまいりましょう。『法華經』自身にはこのような世界の終末や神変の奇跡などについてはなんの説明もありませんし、また『法華經』を読む現代の人々も、これ

らは神話的な物語にすぎないものである、と考えて、その起源を探ったり、意味を考えたりはあまりいたしません。

しかし、仏教には古くから一種の宇宙論がありますし、その中には、この世界の破壊を語る終末論がありました。その終末論も小乗仏教のものと、それが大乗仏教になつてから仏や菩薩の神變あるいは神通力という形に発展したものとがあります。『法華經』の「如來壽量品」に現れる、この世界が火災によって破壊される、というのは小乗仏教の終末論に現れる、世界を滅ぼす「劫火」（世界壞滅の時期に起る大火災）に言及しているものです。

「見宝塔品」や「如來神力品」にあらわれます仏の威神力は大乗仏教の神變を部分的に描いています。終末論にしても神変にしましても、その神話は古代の仏教者的思想表現の一つの型であります。その神話的表現を現代において解説して、そこから思想を引き出すことが実は宗教にとって大変重要なことなのであります。仏教の終末論と神変は空とか無という思想の小乗的な、そしてまた大乗的な形を語っているものであります。

『法華經』が何度も言及している終末論や神變の思想的な意味については後にお話しますが、とりあえず、それらの物語の大筋を整つた形でお話することから始めましょう。

阿含經の中には『世記經』を初めとして、同本異訛と

考えられる四經が世界の終末を含む宇宙論を記述しています。それを基礎にして『世間施設論』、『俱舍論疏』など多くの小乘論書が終末論を体系的に叙述しています。

大乗佛教になると『法華經』『大品般若經』その他、殆どの初期大乗經典が仏の神變を記述しています。私はこの仏の神變が阿含經における小乘佛教の終末論の大乗的な發展に他ならない、と考えます。さらに、淨土教が一種の終末論であることはすでに学者の指摘する所であります。私が『無量壽經』に現れる、阿彌陀佛の他力による衆生救濟の思想が、初期大乘經典に現れる神變に根拠をもつていて、その意味で淨土教も佛教終末論の系譜に含められる、と考えています。世界壞滅の時期に起る火災などの「大の三災」を典型的な小乘の終末論とみなし、大乗の終末論については『大品般若經』の神變を

紹介し、その思想が淨土教の他力思想をも含めて、大乗佛教の「空」の思想に根拠をもつてることをお話し、最後に『法華經』の「藥草喻品」の記述を小乘・大乗の終末論と結び付け、空の思想を簡単に解説してみたいと思います。

二 小乘佛教の終末論——大の三災

小乘佛教の終末論によりますと、この地球は火・水・風の三つの大災害によつて破壊されます。この世界の壞滅は仏が、一切のものの無常を示し、人々に解脱を求めるために説かれるのです。それぞれの災難の直前には人間は仏教を奉じ、十善行を修めていて道徳的に完全であり、平和で安穏な生活をしています。十善行といいますのは、殺生・盜み・邪淫・妄語・兩舌・惡口・绮語(意味のないおしゃべり)・貪欲・瞋恚・邪見の十種の惡行を慎むことで、出家・在家を問わらず、すべての佛教徒の道德規範となつていたものであります。

三災はまず火災から始まります。火災が起る直前に、ある人が色界第二禪を修めて第二禪天に上昇し、禪を妨

げる計らい（尋）や思惟（伺）のない第二禪の樂しさを地上の人々に訴えます。地上の人間はそれを聞いてみずからも第二禪を修めて第二禪天に昇ります。地獄・餓鬼・畜生・六欲天の神がみ、初禪天の神がみもいったん人間に生まれかわった上で第二禪を修めて第二禪天に上昇します。こうして、あらゆる有情が地上から姿を消してしまうことを「趣壞」といいます。

有情がすべて地上から姿を消してしまって、七つの太陽が出現して下は地獄の世界から地上の須弥山・七山脉・湖沼・河川や大海、鉄輪圓山を焼き、上は色界の初禪天界に至るまでの物質世界を焼き尽くして、灰すらも止めないようにします。しかしこの火災は初禪天宮で止まって、第二禪天以上の色界天は火災を免れます。この火災の及ばない第二禪天を「上際」（後には「頂」）といいます。そしてこの物質世界の壞滅は「界壞」といわれるようになります。

有情の消滅と地球の破壊の時期をやや後世の文献は「壞劫」といいますが、その後には空間のみがあつて世界の存在しない「空劫」が長期間続きます。やがて世界は壞滅しますが、第四禪天のみは災害を免れて残ります。この火・水・風の三災が一巡して地球はその輪廻の一周期を終えるわけです。

火・水・風の三災に際して有情がそれぞれ第二、第三、第四禪天に上昇した後に、初禪天以下、第二禪天以下、第三禪天以下の物質世界がそれぞれ破壊されること、そ

して第四禪天のみがすべての災害を免れることについて、阿含經典には何の説明もありませんが、説一切有部の諸論書は次のようにいいます。初禪の境涯にとつて障害（内災）となるものは尋と伺（計らいと思惟）であり、それらは禪者を熱惱する火に他ならない。それに相応して、初禪天以下の外界は火によつて滅ぼされる。第二禪の内災は喜（身体的な喜び）であるが、それは禪者の心身を潤す水に当たる。そのために第二禪天以下の外界は水によつて破壊される。第三禪には樂（精神的な幸福感）と出息・入息が内災となるから、第三禪天以下の外界は

は有情たちのカルマと風と水の力によつて復興し、第二禪天から神がみやその他の有情が降下して地球に住み着きます。この世界成立の長期間を「成劫」といいます。成劫の後には成立した世界が長期間存続する「住劫」がやつてきます。この住劫においては人間は平和・幸福・長寿の時期と戦乱・不幸・短寿の時期を繰り返し、また戦争・疾病・飢饉といういわゆる「小の三災」を繰り返して受けます。住劫の最後には人間は再び八万年の寿命と平和を享受し、みな仏教を信奉し、十善行を修めるようになりますが、そのときに時代は再び壞劫に入り、有情の消滅と世界の破壊が起ります。

第二の災害は水によるものです。この水災の起る直前には人間界のうちの一人が第三禪を修得して第三禪天に上昇し、地上の人々もその人にならい、そして地獄から第二禪天の有情たちもいたん人間に生まれた後に第三禪を修めて、みな第三禪天に昇天いたします。熱水が長期間にわたつて降り、第二禪天以下地上、地下のすべての物質世界が破壊されます。空劫・成劫・住劫を経て再び壞劫がめぐつてくると、人間の一人が第四禪を修め

ここで色界第四禪について多少の解説をしておきましょう。仏教では有情とその環境世界とを欲界・色界・無色界という三界に分けます。前二界にはなお肉体あるいは物質が存在しますから、世界の終末において、第四禪天を例外として、色界第三禪天以下の欲・色界は三災によつて破壊されてしまいます。無色界天は欲望も物質もない純粹に精神的な世界で、方位も場所もない無限の空間でありますから、物質世界の破壊である三災の影響を受けません。上に見たように色界第四禪には禪を妨げるいかなる障害、すなわち内災もないために、それに相応

する外災もなく、「不動」といわれます。禪（靜慮）とか四禪と呼ばれる瞑想は原則的には色界の有情の境涯であります。

勿論、欲界の人間も四禪を修めることはできますが、それは欲界にいながら欲望を超えて色界の境涯に入ることによって可能になるわけです。

第四禪は仏陀や阿羅漢がそこから起つて般涅槃する（絶対的なやすらぎの世界に入ること）所でありますし、また無色界の四つの瞑想（四無色定）は実は色界第四禪において修められます。世界の終末において第四禪天に上昇した有情は、そこから起つて般涅槃するか、あるいは極めて長い寿命を保つて次回に世界が成立するのを待つかするわけです。いずれにしても、それは、小乗仏教においてさえも、第四禪天にある有情が、壞劫の直後にくる空劫という空の世界において救済されることを含意しています。しかし、小乗仏教のこの救済には、(1)有情が自力によつて無常と空のさとりに達するということと、(2)あらゆる有情の救済は世界の終末まで待たなければならぬ、という二つの限界もあつたわけです。

三 大乗仏教の神変

『大智度論』は『大品般若經』の仏の神変を解説するうちにこう言っています。仏が、神変を現すためにあらかじめ三昧王三昧に入るのは第四禪においてであり、また、第四禪天の最上層である色究竟天の上には大乗の菩薩の住所がある、と。また、直後に述べるように、三昧から起つた仏がその身体の各部分から放つ光明を形容して、それは世界終末の劫火の輝き、つまり小乗仏教の大三災の第一である火災、と同じである、と繰り返して述べています。『世記經』は、仏が世界の終末を語るのには有情たちに、あらゆるものは無常であるから努めて解脱の道を求めよ、と教えるためである、と再三言っていますが、『大智度論』は、無常とは空の初門である、と宣言いたします。これらは、大乗の仏の神変を小乗の大三災になぞらえるとともに、大乗仏教においては、無常と空のさとりを得るために世界の終末を待つ必要はない、現在、この世においてあらゆるもののが空性をさとれば足りること、それはしかも宇宙的真理の具現者である

る仏の神変の光に遇うことのみによつて、いわば他力によつて可能となることを宣言することになりました。大乗仏教はあらゆる有情を、阿羅漢ではなくて、仏陀と成らせること、声聞・独覺という小乗の聖者をも大乗の空のさとりに誘導することを目標としていました。神変は有情を、世界の終末を待つことなく、いま、ここにおいて、三界を超えた仏陀の世界に引き入れるものであつたのです。

以下、『大品般若經』の場合を例証として、仏の神変を二段に分けて簡潔に紹介しておきましょう。

(1) 釈迦牟尼仏は最高の瞑想である三昧王三昧に入つて念を凝らしていますが、三昧から起ち上がつて、その身の三十二相、すべての毛孔、常光明（常に身に備える光明）、舌などから順次に無量の光明を放ちます。その光明は全宇宙の十方の無量の世界に遍満します。その光明に遇つた有情はみなこの上ない完全な仏のさとり（阿耨多羅三藐三菩提・無上正等覺）に至ることに決定いたします。舌から出た光線の々々から宝石でできた千弁の蓮華が生じますが、その上には分身の化仏たちが坐つて六波羅蜜の

法、すなわち空のさとりを説きます。それを聞く有情たちも阿耨多羅三藐三菩提を得ることに決定いたします。(2)ついで仏は獅子遊戯三昧に入つて、神通によつてこの三千大千世界を六種に震動させると、有情たちは幸福になり、宇宙の十方にある無数の世界にある地獄・餓鬼・畜生の世界は根絶されて空となり、一切の災難は消失します。三悪道の者たちは死んで人間と六欲天の神がみに生まれ代わり、自國の仏陀たちのもとへ近づいて仏に帰依します。一方、この三千大千世界にあつては身心障害者たちはそれから回復し、狂者は正氣を得、乱心者の心は集中し、飢渴者は飲食に飽き、病者は無病となり、不善の行為をする者たちは善行をなすに至り、みな平等の心をもつて相互に接し、十善行を保ち、清浄な梵行者ともなりました。彼らはみな第三禪に入つた比丘のような妙樂を得るのです。

(3) 釈迦牟尼仏は光と妙形と焰と栄光に満ちて三千大千世界を圧倒して立ちます。仏が本来の人間としての常身を示すと、色界の諸禪天の神がみ、六欲天や人間たちが香料・花輪・衣・旗・蓮華・睡蓮などを持つて釈迦牟尼

仏に近づいて、供養し、散華します。この三千世界も十方の諸世界も光り輝き、この三千世界の有情たちは十方諸世界の諸仏と有情たちを見、諸世界の有情たちはこの娑婆世界を見て、相互照見がなりたちます。十方世界の諸仏国土から派遣された諸菩薩たちが釈迦佛の集会に加わり、彼らの散華によってこの三千大千世界は淨土に変わります。

第一段の描くこと、三昧王三昧から起つた仏の放つ光に遇う有情はみな無上正等覺を得るに至る (*anuttara-samyak-sambodhau niyatati*)、すなわち正定聚に入る (*samyaktevniyatati*)、といふのは、仏のあるいは宇宙の真理である空性という他力による完全な救済を物語つてゐるのです。もつとも『大智度論』の解説によれば、これは仏に対する信仰をもつ有情にのみ起ることであります。

第二段には、獅子遊戯三昧から起つた仏の放光が三悪道（地獄・餓鬼・畜生）を消失させ、人間や六欲天に生まれ代わった惡道の者たちが幸福となり、自國の仏のもとに至つて仏教に帰依し、また人々が幸福となつて十善行を行ないます。

第三段の宇宙の諸仏国よりの菩薩の娑婆世界への來訪とその諸仏国と娑婆国土との相互照見、この三千大千世界が淨土となることなどは先に触れた『法華經』における釈迦牟尼仏の神変・神通力と同じであり、また『華嚴經』においても主要なモチーフになつてゐるものです。

第四 『大無量寿經』と神変

『華嚴經』において初めて現れます。『大無量寿經』においては色身に当たる釈迦牟尼仏と法身あるいは受用身（報身とも言う。法身と色身とを媒介する仏身。阿弥陀仏はこの報身仏であるとされる）に当たる阿弥陀仏が現れます。阿弥陀仏が現れますが、神変の主役は阿弥陀仏となっています。阿弥陀仏は放光の神変に代えて信心と念佛を有情に与え、淨土往生という形での「必ず無上涅槃を得るに決定する」と（正定聚、*samyaktevniyatati*）という救済を約束するのです。この正定聚という言葉は『大品般若經』における「阿耨多羅三藐三菩提を得るに決定すること」 (*anuttarasamyaksambodhau niyatati*) という語と意味において同一であります。

『大無量寿經』は二種類の往生を説いています。阿弥陀仏への真実の信心をもつて念佛する者には眞實報土へ往生して正定聚に入ることを約束しますが、他方で、仏を信ぜず、ただ淨土の幸福のみを求める功利心のみで念佛する者は化土（疑城胎宮）に留まつて、報土に生まれる前に五百年のあいだ仏を見ず、法を聞くことができないという方便化土へ往生することになつています。この身のこの地上における顯現としての仏に分ける二身説は

を修め、身心障害者・病人・飢渴の者などがみな回復し、不善行の者たちがみな善行者にかわる、というのは、第一に小乗の終末論における惡道の有情や凡夫や六欲天の有情たちが天界に昇つて救済されることに通じるとともに、第一に、それまで仏教に信仰をもたなかつた者たちが自國の仏陀に帰依して仏教徒になり、救済とさとりへ誘導されることを意味しているのです。ここには、仏教に信仰をもつ者とそうでない者とが一應区別されて段階的に救済されているのです。

第三段の宇宙の諸仏国よりの菩薩の娑婆世界への來訪とその諸仏国と娑婆国土との相互照見、この三千大千世界が淨土となることなどは先に触れた『法華經』における釈迦牟尼仏の神変・神通力と同じであり、また『華嚴經』においても主要なモチーフになつてゐるものです。

二段階の救済も『大品般若經』における二段階の救済の影響のもとになったものに違いありません。このように見てくると、『無量寿經』は『大品般若經』の神変を継承して阿弥陀仏の救済を説く經典として成立したものといえるのであります。

五 終末論・神変と空思想

小乗仏教の「大の三災」の示している終末論はキリスト教などの西方の一神教の終末論と大変に違つております。『新約聖書』の「黙示録」に現れるキリスト教の終末論では、世界の終わりに、神に従う者たちの軍勢と悪魔に加担する者たちの軍勢とが戦い、ハルマゲドンにおける最終的な戦闘で神の軍隊が悪魔の軍隊を破り、神に信仰をもつ者たちは神の国へ迎えられる一方で、悪魔に加担した者たちは地獄に落ちます。ここでは人々は二種類に分けられ、その運命も全く異なったものとなります。

大の三災に描かれる小乗仏教の終末論では、世界の終末の時期には人々は最高の道徳的水準にあり、長寿・繁栄・幸福、そして平和を享受しています。そして火・水・

風の三災が起つてこの地球の物質世界を破壊する直前に、人間はもとより、地獄・餓鬼・畜生や神がみなどもいつたん人間に生まれかわった後に、禪を修めて色界天に上昇して、世界壊滅の難を避けるのであります。風災という最終的な災害に先立つて有情たちは第四禪にまで上昇して難を避け、そこから般涅槃するか、あるいは長寿を得て次の地球の成立を待つかするのです。ここでは世界の終末はあらゆる有情たちの救済に繋がつてゐるのです。三災の後につくる、世界が無に帰して空間のみが残るという空劫とは、究極的なさとり、涅槃に導く空の洞寢を象徴しているわけであります。

ここで詳しく述べることは省略しますが、原始仏教におきましても、ブッダは無我を説き、「世界を空なりと観ぜよ」と言つていまして、空の思想はあきらかに存在しております。アビダルマといわれる小乗部派の教学におきましては、原始仏教の精神から逸れた実在論も発生いたしましたが、幸いなことに終末論には原始仏教の空の思想が伝承されていたに違いないのです。

大乗仏教の仏陀の神変は、小乗の大の三災を継承しな

がらも、三災を仏の三昧の力（神通力）と放光に代え、その光明に触れる有情たちはすべて無上正等覚を得ることに決定するという思想を発展させました。また、未だ仏教への信仰をもたない有情たちを自國の仏陀に帰依させて救いに近づけ、身心障害者・病人を癒し、不道徳の者を道徳を守る者にかえるなどして、救済の道を用意しているのであります。これは仏の方便以外の何ものでもありません。なによりも、小乗の大の三災において有情たちの救済が禪を修行することによって可能となつていたものを、仏の光に触れて空をさとるという他力の救済に代えているのです。ここでは出家・在家の別なく、あらゆる有情の救済が説かれています。そして、その救済は世界の終末を待つまでもなく、いま、この世において、空をさとることだけによって可能となつたわけであります。

六 法華經・薬草喻品と空思想

このように考えてきますと、私は『法華經』の「薬草喻品」を思い出さずにはいられません。この章の構成は

上に述べてきた仏教の終末論の思想を別の形態で表現しているからであります。「薬草喻品」ではこの三千大千世界（いわば銀河系）にあるさまざまの種類の草・灌木・薬草・樹木が、三千大千世界を覆いつくして湧き起ころ雲から降る雨水のおかげで育つてゆく有り様が語られます。草・灌木・薬草・樹木には細いもの、太いもの、大きなもの、小さいもの、若いもの、老いたものなど種々様々な区別がありますが、三千大千世界に降る雨は一味であります。それと同じように、仏の教えは、方便による説き方に種類の別があるとしても、解脱の味をもち、涅槃を究極的目的とし、つねに寂滅しているという点で一味であります。その教えを受ける有情たちには能力や努力の優劣の相違がありますから、教えの受取り方には凡夫・声聞・独覺・菩薩でそれぞれ相違があるものの、教えそのものは同じ涅槃を目的とする一味の教えに違いません。その教えによつて、「彼ら有情たちはまさしくこの現在「の世」において安樂なものとなり……その法を聞いてから、障害の除かれたものとなり、またその力量に応じ、その場所に応じ、その勢力に応じて、順々

に一切知者の法に専心するのである。」仏は言います。

「いやしい人々にも、卓絶した心の持ち主にも、機根の鈍い人たちにも、「等しく」私は法を説く。すべての怠惰な心を捨てて、私は正しく法の雨を降らせるのである。」

「この世の中には、これらのかわめて小さい薬草もあり、やや小さな薬草も、ほかに中位のものや、大きな薬草もある。お前たち、聞きなさい。それらをみな私は説明しよう。汚れのない法を体得し、涅槃に到達している人たち〔すなわち声聞たち〕、また六種の神通を得、三種の英知（三明）をそなえた人たち、それらが小さな薬草といわれる所以である。山窟に住む人たち、おのおの独自のさとり（独覺あるいは縁覺のさとり）を望む人たち、このように半ば淨らかな覺知のある人たち、それが中位の薬草といわれる所以である。人中の牛王（仏陀）となることを目的とし、人間や神がみの保護者である仏陀に自分はなるであろう、と言つて、精進努力と禪定とを行う人たち〔すなわち菩薩たち〕、それが最高の薬草といわれる所以である……常に世間を幸福にするこの教えるものは、このあらゆる世間を法をもつて満ち足らしめる。

満ち足りたすべての世間はやがて薬草の「ように」花を咲かせる。中位の薬草として生長せるものとは、煩惱の汚れのないことに安住しているかの阿羅漢たちや、森林において修行する独覺たちのことで、彼らは、このよく説かれた法をふみ行つたものである。多くの菩薩たちは、志が篤くまた堅固で、三界に属する事物のすべてに渡つて精通し、この最高の菩提を求めている。彼らは常に喬木のように「大きく」成長する。四種の禪定を行つて神通〔の力〕を身につけ、空性〔の真理〕を聞いて喜びを生じ、幾千の光明を放つて「人々を救う」。彼らこそ、この世で巨木であるといわれる所以である。」如来は同一の法を説くが、それに対しても種々の解釈があることが、一つの雨に対して個々別々の水滴があるようなものである、と『法華經』は言うのです。

「正しいさとりを得た尊敬さるべき如來たちの一切智者としての知から出る心の光は、あらゆる有情に対しても目が見えるだけであつて、家の中にいれば外のことは何も知らないし、人の心のうちも、遠方の音も、自分が母の胎内にいた時のことも前世の行動も知ることができないのに、どうしてそんなに高慢になれるのだ」と叱責いたします。そこで目の治った人はあらためて自分の無知に気付き、聖者に問うて、善行と徳性とすべてを知る智慧を求める始まります。

その視覚障害者と同じように、輪廻のなかにいる有情たちは無明によって盲いた障害者と同じであつて、苦しみの大塊の中にいるのです。如来はこの世にきたつて、有情たちが輪廻から離脱する道を説き、巧みな方便をもつて声聞・独覺・菩薩の三乗を説くのです。菩薩たちは無上のさとりを求める心を起こし、ものは本來生ずることがないと認容する知（無生法忍）を得て、この上ない正しい菩提をさとるのであります。風と胆と痰の体液とは貪りと怒りと迷惑（貪・瞋・痴）のことであり、

四種の薬草とは順次に「すべてが空であること（空性）」するものに分かたれる。「それら一切の有情に対して」――正しい法の説法として平等にあらわれる所以である……三つの乗り物〔の区別〕は「眞実には」存在しない。ただ有情たちがそれぞれ行動を異にするだけであり、それゆえに三つの乗り物が設けられるのである」。

「薬草喻品」には生まれつきの視覚障害者とその人を治癒する名医の比喩が出てまいります。視覚障害のある人はこの世の中に太陽や月や人々や様々なものがあることを知りません。名医は病といふものには風性のものと、胆汁性のものと、痰性のものと、それらの複合したものとがあることを知つていて、また雪山には四種の薬草、(1)「あらゆる色と味の素因を具備した」という名の薬草、(2)「あらゆる病氣から解放する」という名のもの、(3)「あらゆる毒を消す」という名のもの、(4)「素因のそれぞれに応じて楽を与えるもの」と名付けられる薬草があることをも知っています。彼はこれらの薬草を探し求めて、視覚障害者に与えます。視覚障害者は視力を得て、それまでの自分が何も知らなかつたことに気付くとともに、いまは視力を得て、すべてのものを見ることができ、自

「すべてに形相のないこと（無相）」「すべてが欲求の対象でないこと（無願）」および「涅槃の門」との四つに他なりません。空・無相・無願という三解脱門を修行して、人々は無明を滅するのです。視覚障害者が目を得るのと同じように、声聞の道に属し、独覺の道に属する人々も輪廻と煩惱との束縛を断つのですが、彼らはそれによつて「さとらねばならない法はこれ以外にはない、私は涅槃に達したのだ」と思うに至ります。そのとき如来はこう言います。「すべての法を体得していないものにどうして涅槃がありえようか」と、また「これは静止であつて、涅槃ではない」と。如来は彼を菩提に向けて鼓舞いたします。彼は菩提心を起こして、輪廻のなかに止まりはしないが、また涅槃に到達しもしないもの、すなわち菩薩となります。彼は、三界に属するものはすべて空であるとさとり、また世間は変化に等しく、幻に等しく、夢、陽炎、反響に等しいと見るようになります。彼はすべての存在について、生じることもなく、滅することもなく、束縛でもなく、解脱でもなく、暗黒でもなく、光明でもないと見ます。彼は見ないというあり方をもつて

見るのです。すべてのものは空であり、実体を離れている（無我）と知る人は、正しいさとりを得た世尊たちの菩提を眞実に知るのである、と『法華経』は言っているのです。

「薬草喻品」の最後には「空」についてまとまつた思想が詩節の形で説かれています。如来は声聞たちを無上正等覚に向かって鼓舞して言います。「一切を知ることなしには〔眞の〕涅槃はありえない。このこと〔すなわち一切智性〕に向かって努力せよ。〔過去・未来・現在の〕三世に關する無限知と、淨らかな六種の完成の行（六波羅蜜）と、「すべては」空性であり、無相であり、無願について努力せよ。また、煩惱の汚れのあるもの（有漏）もその汚れのないもの（無漏）も、いずれも虛空にも等しく寂靜である……。「あらゆる」存在は、幻や夢を自体とし、芭蕉の茎のように實質がなく、反響に等しいものであると知る人、また三界に属するものはすべてこれら〔幻、夢など〕を自体とするのであって、束縛されたものでもなく、解脱したものでもないと知り、涅槃をも識

別しない人、「さらば」すべての存在は平等であり、空であつて、相互に相違することのないものであるが、これらを対象化することなく、どんな存在（法）をも見ることのない人、このような人こそが偉大な智慧のあるものであり、残りなく存在の全体を見るものである……一切の法は等しく、あらゆるものは等しく、つねにまつたく平等である。このように知ることによつて、「人は」不死で吉祥な涅槃を知るのである。

一切を知る、といふことは、あらゆるもののが空である、ということを知ることであります。それを知れば、空であるという点であらゆるものは平等であることが分かります。空を知るということは、あらゆるものに実体がない、と知ることです。したがつて、生死も涅槃も、輪廻も解脱も、実体がなく、空であるという意味で、それとして認識し、識別されることはありません。だからさとつた人にはいがなる存在をも見ることがなく、そのことこそが一切の存在を見ることである、という逆説が成り立つのであります。

龍樹（一五〇—一五〇年ころ）は、空とは、いかなるものが正しいのであります。

のにも実体（自性）がないことである、と言いました。その実体とは、他のものに依存することのない自立的で、けつして変化せず、そして永遠に存在する永続的な単体である、と言いました。そのような実体（自性）がいかなる存在にもないと知ることが空の智慧であります。私たちが身のまわりを見てみましても、自立・不变・永続的な単体などはどこにもありません。机は樵夫が山の木を切り倒し、それを建具屋さんが机の形に細工し、ペンキ屋さんが色を塗り、誰かがそれをこの部屋に運んできて、この部屋の床の上に置かれて存在します。それは古くなれば変化し、割れば薪になり、燃やせば灰と煙になってしまいます。他のあらゆるものも同じように、必ず他のものに依存し、変化し、無常であり、複合的な存在でありますから、そこには実体はありません。ただ私たちが長いあいだ、机にある机という概念を机の本質であり、実体であると思いこんできただけのことであります。しかし、概念は私たちの観念にすぎず、外的な存在ではありませんから、机は実体をもたず、空である、という

普通には、世界を創造した唯一の神とか、個人の靈魂である自我とか、物質的な世界では原子とかが実体と考えられています。神も靈魂も、生まれもしないし、死にもしません。肉体は死んでも自我は永遠に存在すると考えられています。原子は物質の究極的な要素としての単体である、と少なくとも十九世紀までは考えられていました。しかし、仏教は唯一なる創造神も、個体存在の中核である不滅の自我も、また原子という物質的実体をも初めから認めませんでした。現代の物理学でも、原子を物質の究極的な粒子としては認めていません。原子は原子核と電子に分解され、原子核は陽子と中性子に分解され、その陽子や中性子は三つの「あるいは六つの」クオーケに分解され、クオーケもなお分解されるかもしれないからであります。素粒子物理学では、素粒子といわれるものはその位置と運動が同時には観測されず（ハイゼンベルクの不確定性原理）、それは粒子でもあり波動でもあり、いわば布に染み込んだインクのしみのようにボヤつとした、不確定なものであります。素粒子の世界とは基本的にはただ確率的に予測できるだけで、確定値の得

られない世界であります。仏教も、そして現代物理学も、これらの実体の存在を否定するのであります。いわば現代科学でも空は真理として復権しているのであります。

（かじやま ゆういち・創価大学教授）

（本稿は一九九六年十月十六日に行われた当研究所主催の公開講演会における講演内容に加筆していただいたものです）